

手話奉仕員スキルアップカリキュラム検討ワーキング 事業実施報告

①事業概要

名称：「手話奉仕員スキルアップカリキュラム検討ワーキング」

目的： 手話奉仕員スキルアップ講座のカリキュラム策定、講座の内容、ロードマップ等について検討を行い、社会資源増加の基盤を整える。

検討期間：平成29年9月から平成30年3月（9/26、10/30、12/1、1/16、3/13）

委員：7名

分野	委員名	所属・役職等
学識経験者	坂井田美代子	手話奉仕員養成テキスト編集委員会委員 手話通訳者養成テキスト作業部会委員
講師経験者	伊倉睦美	三聴障協登録手話奉仕員養成講師 伊賀市設置通訳者
	加藤静香	三聴障協登録手話奉仕員養成講師 いなべ市聴覚障害者協会
奉仕員養成事業実施市職員	早川奈緒美	四日市市設置通訳者
	中有美	伊勢市設置通訳者
三聴障協職員	倉野直紀	常務理事
	加藤恵美	三重県聴覚障害者支援センター手話課

②ワーキングの進め方

まず、三重県における奉仕員養成事業や手話通訳者養成事業の現状について分析を行ったところ、奉仕員修了者が手話技術や心理面の理由により、通訳者養成講座の受講意欲や面接合格に結びついていないことがわかった。

上記の分析結果を踏まえ、ワーキングを重ね、スキルアップ事業の位置づけや目標設定、対象者やカリキュラムの検討を行った。

(1) 県内市町奉仕員養成事業の現状

・奉仕員養成事業実施市町

いなべ市、桑名市、四日市市、鈴鹿市、伊賀市、名張市、津市、松阪市、伊勢市、志摩市、東員町、菰野町、明和町・・・10市3町

地域によって、単年度または複数年度での実施と違いはあるが、毎回、ほぼ半数以上は修了している。毎年度の修了者は各市町を合計すると100名を超えており、年々増加する手話奉仕員は社会資源の基盤となりえる。

・実施市町に共通する課題

養成の目的が「①社会資源の創出」「②手話通訳者の増加」と地域によって異なるため、奉仕員養成修了者をどう活かしていくかが、市町が抱えている悩みである。

①を目的としている地域では修了後にボランティア登録を促し、地域の社会資源としてボランティア祭りや障がい者体育祭でボランティアをお願いしている。

そもそも、奉仕員養成講座の受講動機、目的も個々によって異なっているため、修了者の意識も地域でボランティア活動を望むものと通訳者を目指すものと分かれている。

なお、奉仕員養成修了者へのステップアップ講座を行っているのは、四日市市、伊賀市、津市、伊勢市、志摩市である。しかし、その内容や時間数は統一されていない。

年度	地域	伊賀・名張			いなべ・東員			志摩			鈴鹿		
		申込み	修了	修了%	申込み	修了	修了%	申込み	修了	修了%	申込み	修了	修了%
H26		40	23	57.5	※未実施			※未実施			※未実施		
H27		40	25	62.5	29	28	96.5	30	29	96.6	29	20	68.9
H28		32	21	65.6	26	21	80.7	30	28	93.3			
H29		41	22	53.7	21	19	90.5				※単独実施のため不明		
合計		153	91		76	68		60	57		29	20	

年度	地域	菰野			四日市			伊勢市		
		申込み	修了	修了%	申込み	修了	修了%	申込み	修了	修了%
H26		※単独実施のため不明			20	15	75	17	10	58.8
H27		※単独実施のため不明						25	16	64
H28		19	19	100	15	12	80	H30修了予定		
H29										
合計		19	19		35	27		76	26	

(2) 手話通訳者養成事業の現状

三重県が行っている手話通訳者養成事業は、過去4年間で受講申込者数62名（毎年度平均15.5名）である。しかし、毎年度の手話奉仕員養成講座修了者（各市町合計）が100名を超えていることを考えると、手話通訳者養成講座の受講申込者数はかなり少ないと感じる。

また、約半数が受講面接で落ちている。そのため、受講者数が定員（平成27年度から定員12名に変更）に達することがほとんどない。

面接は「特定のろう者との会話ができる」かどうかを見るものであり、その方法は面接委員（ろう者）からの手話による「手話を始めたきっかけは？」というようにいくつかの簡単な質問に対して、手話で回答するというものである。

つまり、受講者申込者の約半数が手話通訳者をめざしたいという意欲があっても、手話技術は簡単な手話のやり取りができる水準に達していないと考えられる。

開講年度	申込み	受講	修了	面接合否	修了%
H26	9	8	7	88.9	87.5
H27	18	12	11	66.7	91.7
H28	20	10	8	50.0	80.0
H29	15	8	※1	53.3	※1
合計	62	38	26	61.3	68.4

※1.養成講座の期間が平成29～30年度のため、実施中

(3) 現状の分析及び課題

各市町で手話奉仕員養成講座を同じカリキュラムで開催していても、開催日時が平日昼間、平日夜、休日昼間とバラバラであることもあり、開催期間や到達点（修了時点での手話技術、修了者の位置づけ）が違う。

また、限られた時間で、講師はカリキュラムをこなす、受講者も「手話を学ぶ」ことに精一杯であるため、特に奉仕員基礎課程で詰まりやすく、修了時点においてまだ手話を使いこなせていないことも多い。それが手話通訳養成講座の面接で落ちる一因となっている。

手話奉仕員養成講座修了者を手話通訳者養成講座へつなげることを講師も受講者も意識しておかなければならないが、手話奉仕員養成講座を受講する人たちの動機はさまざまであることにも留意しなければならない。

これらを踏まえ、各市町で奉仕員養成講座の指導を担う講師たちが、奉仕員養成講座修了の到達点を共通認識することが必要である。また、修了者へこれからのイメージを示しておくことも、今後の学習意欲向上につながる。

当ワーキングでは、手話通訳者養成講座受講の面接を受けるにあたり、受験者が「手話を使える」水準に達していることを目標とし、その視点で手話奉仕員スキルアップ講座カリキュラムを策定する。

また、手話を学ぶ人たちに、多様な道を示すためにロードマップを作成する。

③スキルアップカリキュラムの策定

目的…通訳者養成講座受講の面接合格を目指す

対象者…奉仕員養成講座修了者および同等のレベルの人で通訳者を目指す意欲がある人

※通養受講対象者は手話検定3級～2級の会話レベルに到達とテキストに掲載されている。なお、志摩市はステップアップ講座の目標に手話検定3級取得としている。

しかし、スキルアップ講座の受講条件のハードルが高すぎるのはよくないと思う。奉仕員養成で十分でなかった人も受け入れて基礎を再確認してもらおう講座とし、入口は広く設定する。

例えば、「奉仕員養成講座修了者」「手話検定3級以上の者」「手話サークルで活動している者」「地域ろう協会が認める者」があげられる。

定員…グループに分かれての会話練習を想定し、定員は20名とする。

※講師はろう講師と聞こえる講師のペアで2名。なお、内容によっては全体担当講師と複数のろう協力者が必要な場面がある。地域のろう者の協力なしには講座は成り立たないことに留意されたい。

内容… ①日常会話ができる（入門基礎で学んだことができるようになる）

②通訳者になる目標をもてるようにする

- ・通訳者を目指す姿勢（思い、気持ち、心）を育てる。
- ・通訳者養成を目指す人に通訳者の仕事をわかってもらう、関心を持つ
- ・自分の目指す通訳者像を見つける
- ・通訳者を目指す人たちに分かってほしいこと
- ・ろう者ととともに歩む姿勢を学ぶ

時間数…総時間30時間/全20講座（実技16講座、講義4講座）/1講座90分

※実技16講座（初期4講座、中期7講座、後期5講座）

※講義4講座（「ろう者の立場から」「手話通訳者の立場から」「コーディネーターの立場から」「受講者グループと先輩通訳者の懇談」）

カリキュラム…別紙参照

④ロードマップの作成

手話学習者たちの動機は、単に手話に興味があったから、または手話を学びろう者と会話をしたい、あるいは手話通訳者を目指したいと、三者三様である。そもそも手話奉仕員養成講座の目的は、手話通訳者になることではなく、「日常会話ができるぐらいの手話を身につける」「聴覚障害や聴覚障がい者の生活及び関連する福祉制度等について理解を深め、地域の社会資源となる」ことである。

手話奉仕員養成講座修了者という社会資源をどう捉え、位置づけるかを考えなければならない。また、県内に40ヶ所以上はある手話サークルに通う手話学習者も潜在的な社会資源といえる。

手話通訳者を増やすと同時に、ろう者ととともに歩む人（社会資源）を増やし、活かしていくことも重要である。手話を学ぶ人たちに、自分が今どの位置づけにおかれているか認識できるようにするとともに、手話通訳者や手話を活かしたボランティア活動など多様な道があることを示したい。

目的…手話学習者にとって、自分が置かれた位置づけ、これからの多様な道があることがわかるものを示す。

ロードマップ…別紙参照